

5・6歳齡児童における感謝感情の理解

青木 奈美

【背景と目的】感謝感情とは「他者の善意によって自己が利益を得ていることを認知することによって生じるポジティブ感情」(Tsang, 2006 ; 本多, 2010)である。感謝には自身の幸福感や精神的健康を高める、他者との人間関係の構築・維持を促すなどさまざまな機能があり、日常生活で他者と相互交渉を行いながら生きていくうえで、感謝は欠かせない感情である。にもかかわらず、感謝を中心に扱った先行研究は少なく、数少ない研究の大部分は欧米において、成人を対象に検討したものが中心であり、日本人を対象にした研究や幼児を対象にした研究はほとんどない。本研究では、①日本人の5・6歳齡児における感謝理解について検討すること、②感謝理解と誤信念理解の発達の関連を明らかにすること、③感謝理解の個人差が仲間関係に及ぼす影響を検討すること、④4・5歳齡から5・6歳齡にかけての縦断データにより誤信念理解と中心性の発達的变化を検討することを目的とした。

【方法】大阪府内のこども園の5・6歳齡児クラスに所属する36名(男児26名、女児10名、平均月齡73.62ヵ月)を対象に、感謝理解課題、誤信念課題を実施した。またスキャンサンプリングによる児の近接データから児の中心性指標を得た。本研究の協力児は前年度(4・5歳齡時点)にも同様の課題および観察を受けており、本研究では4・5歳齡および5・6歳齡時点の誤信念課題得点と中心性指標を得た。

【結果と考察】(①5・6歳齡の感謝理解)協力児の大部分が受益者の感情として利益提供者の行為に関連したポジティブ感情を回答し、また受益者は困っている利益提供者を助けるべきだと答えた。つまり5・6歳齡児においても感謝感情が一定程度、経験・理解されており、感謝の発達は5・6歳齡からも始まっている可能性が示唆された。(②誤信念理解と感謝理解の関連)4・5歳齡時点の誤信念理解は単独では5・6歳齡時点の感謝理解に影響を与えていなかったが、5・6歳齡時点の誤信念理解を介することで間接的に感謝理解に影響を与えていた。つまり誤信念をよく理解している児は感謝感情についてもよく理解していることが示された。感謝を理解するためには、利益提供者の心的状態、つまり受益者の欲求を満たす意図をもって行動したことを認知する必要があるためだと考えられる。(③感謝理解と仲間関係の関連)感謝理解が児の中心性に影響を及ぼしているとは言えなかった。このような結果になった理由として、まず中心性指標の限界が考えられる。中心性は集団の仲間関係を完全に反映していると言い難く、実際より過大、あるいは過小評価されてしまう可能性があった。次に、この年齢が感謝感情の初発の時期であり、感謝感情の発達が不十分であることが考えられる。幼児期では感謝の道具的な意義が重要視されることや、児の社会的能力が人気に反映されるには一定の期間が必要だと示す先行研究もある。以上から、感謝の理解が児の仲間関係に反映されるのはもう少し後の年齢だと推察できる。(④誤信念理解および中心性の発達的变化)誤信念理解について、4・5歳齡から5・6歳齡にかけて通過から非通過へと退行した児はおらず、誤信念理解はいったん獲得されると逆戻りすることはほとんどないことが示された。また4・5歳齡から5・6歳齡への得点変化から、誤信念理解は短期間で急激に発達するのではなく、数年間をかけてゆるやかに発達していく可能性が示唆された。中心性について、4・5歳齡でも5・6歳齡でも多くの児と遊ぶ児や、少人数や1人で遊ぶ児は共通していた。4・5歳齡から5・6歳齡の間のクラス替えによるコミュニティの変化を考慮すると、仲間内で人気のある児というのは普遍的な特性や能力を有している可能性が示唆された。(比較発達心理学)